

## 1. 研修の概要

今回の研修では、テヘラン、イスファハーン、ヴァルザネ、カーシャーンの 4 都市を訪問した。テヘランでは、SIR での講義、筆者を含む日本人学生によるプレゼンテーション、外務省への訪問、国立博物館の見学、SIR の学生との交流を行った。イスファハーンでは、ジャーメモスク、イマーム広場などを見学し、ヴァルザネでは、砂漠の見学、ラクダによる粉ひき、牛を使った水くみなどを見学した。カーシャーンでは、市長訪問やバーザール見学を実施した。講義、首都テヘランから地方都市の見学を通じて、イランについて多角的に学べるプログラムであった。

今回の研修報告書では、SIR での講義や学生の発言を軸に①イランの外交的立ち位置②イランの国民性の 2 つの視点に分けて研修での学びを述べたうえで、最後に全体のまとめを述べる。

## 2. イランの外交的立ち位置

講義や学生との会話で頻繁に登場した言葉は「イランの特徴を理解してほしい」であった。つまり、イランの置かれた地理的、政治的な特徴を理解すればイランの外交政策について理解できるという意味だ。イランは、周りをトルコやアラブ諸国、中央アジアやインドなど文化的、民族的に多様な諸国に囲まれている。そのような状況下では、国防の優先順位が圧倒的に高く、軍事に力を入れざるをえないことが察せられた。加えて、「特徴のない国はない、世界の国はみんな同じ」という趣旨の言葉を教授や学生から多く聞いた。日本人のイランに対するイメージとして「厳格なイスラム教の危険な国」があげられるが、学生との交流を通して多くのイラン人は世界に対する理解を深め、平和を望む友好的な人々だという印象を受けた。このような言葉の背景にはイランが実に多様な文化と民族を内包した多民族国家であることがあげられると考える。実際に、筆者が SIR の学生に平均的なイラン人の暮らしについて質問したところ、「イランには多種多様な民族がいるから、平均はない」と返ってきた。イランという国にはイメージに反して、色んな文化を受け入れる下地があると考えている。

その一方で、一貫して感じたのは欧州とそのメディアへの批判の姿勢とアジア重視の姿勢である。SIR の講義では、例えばウクライナに対するロシアの軍事侵攻について、「イランには関係のない話」と切り捨てた上で、「欧州はイランに対して経済制裁で報いたのになぜ助けないといけないのか」や、「ウクライナの問題を欧州は国際問題に仕立て上げようとしている」といった主旨の発言が散見された。加えて、SIR の学生からも「欧州のメディアはイランに対して偏見をもっている」といった発言を多く聞いた。また、そのような欧州メディアの姿勢について「欧州メディアはイランに来ることなく、イランのことを報道している」と批判している発言も印象に残った。このように欧州に関して批判する発言が目立った一方で、アジア諸国との関係性を重視する発言が多く見受けられた。SIR の講義でも、「欧州は経済制裁で報いたのに対し、アジア諸国はしなかった。周辺地域の国家と関係を向上させていきたい」といった主旨の発言が多かった。

外務省での講義でも、G77 や OIC など第三世界や周辺地域の枠組みの中で、重要な役割を担ってきた国であることを感じる事ができた。

以上をまとめると、イランの外交政策に共通する考え方は「全ての国に対して理解を示すが、自国に対して敬意を欠いた国に対してはそれ相応の報いをする」だと理解した。実際に、ロウハニ前大統領の就任演説の中にも「制裁ではなく、イランへ敬意をもって演説してほしい。」<sup>1</sup>という発言がある。イランの外交政策に一貫する考えともいえる。

また、「アメリカと敵対する反米国家」というイランに対するイメージに反し、外交政策ではそれほど大国を意識していないことがわかった。研修を通して、アジア諸国との関係性については前向きな発言が多くみられた一方、アメリカの話はほとんど見られなかった。これはイランが、イラン・イスラム革命において、「被抑圧者の革命」を標榜していたことにも起因すると考える。イラン・イスラム共和国憲法には「(中略) イスラム共和国は世界の被抑圧者の抑圧者に対する闘争を支援する<sup>2</sup>」という文言がある。即ち、イランにおいて気を払うべきは被抑圧者たる小国であって、大国ではないのだ。加えて、様々な文化的背景を持つ国と国境を接するイランにおいて、一番の優先課題は国防であり、そのためには周辺諸国との関係性の向上が不可欠である。国防に直接関係しない大国同士との争いよりも地域の安全の方がイランにとって優先順位が高いことが察せられた。

### 3. イラン人の国民性

次に、イラン人の国民性についてまとめる。研修を通して、SIR の学生やイランの人々と接して感じたのは「自国に対する誇りの高さ」である。例えば、外務省の外観からレストランのスプーンの柄までアケメネス朝の壁画を模したモチーフがあしらわれていた。筆者がペルシア語を勉強していることを伝えると、必ず「好きな詩は何？」と聞かれた。このように自国の歴史や文化への誇りがみえる一方、現状への「被害者意識」を感じた。言葉を選ばずに述べると、誇り高さの反面、自己反省の文化がない。例えば、学生とのディスカッションで、核開発の話になったときに、イランの核開発は「電力を作るため」とした上で、「他の国は自国のために電力を作るのに、なぜイランだけが許されないのか」という主旨の発言がみられた。このように西洋からの批判に対して「なぜイランだけが」という発言は要所で見られ、イランの誇り高さの裏返しを感じた。彼らにとって、「特徴的でない国はない」というようにイランは他の国と同じであり、西洋からの批判は「イランを実際に見てないから」というわけである。

加えて、印象的だったのは Islamic Revolution and Holy Defense Museum である。この博物館では、イラン・イスラム革命が起こるまでの過程と、イラン・イラク戦争に関する展示がなされている。イラン・イラク戦争に関する展示では、爆発音や戦地の気温を再現されている展示があり、戦争の悲惨さを直に体感できるようになっている。特に筆者が印象的だったのが、こうした一連の戦争に関する展示の締めくくりとして最後にイマームザーデ（聖者廟）がおかれていたことである。このイマームザーデは、ホセインとその兄弟のイマームザーデであり、「カルヴァラーの悲劇」とイラン・イラク戦争を重ね合わせる意図があると考えた。即ち、戦争の犠牲者は単なる犠牲者ではなく聖

<sup>1</sup> ロウハニ前大統領の就任演説 (2013) [متن کامل سخنان دکتر روحانی در مراسم تحلیف \(president.ir\)](http://president.ir) 筆者訳

<sup>2</sup> 日本イラン協会編 (1989) 「イラン・イスラム共和国憲法」 p. 41. 日本イラン協会

なる革命を守るために戦った殉教者であり、戦争が一種の英雄神話に仕立て上げられていることを感じた。日本において、似たような博物館として広島原爆資料館があげられるが、日本において第二次世界大戦が「二度と起こしてはいけない悲劇」として自己反省とともに否定的に捉えられているのに対して、イランでは、戦争は革命を守るために戦った殉教者の話として肯定的に受けとめられていることを感じた。博物館において、イラン・イラク戦争はイラクの侵略によって起こったものであり、イランはその「被害者」であるという主張を一貫して感じた。

このような誇り高さやそれに付随する被害者意識や自己反省の欠如は前項で述べた、「自国に敬意を払わない国にはそれ相応の報いをする」という価値観につながっているのかもしれない。

#### 4. まとめー「多民族国家」イランー

最後に本報告書のまとめを述べる。日本人のイランに対するイメージとして「危険な反米国家」というイメージが多く聞かれるが、今回の訪問でそういった側面ではない多様なイランを知ることになった。今回の研修の性質上、SIRの教授や学生の発言を多く取り上げ、一つの見解を出したが実際のイランにはもっと多様な意見が内包されているであろうことは想像に難くない。この研修を一言でまとめるなら「多民族国家イラン」である。最後に筆者がそれを一番強く感じた例を出して、本報告書でのまとめとしたい。

本派遣期間の少し前には、ヒジャーブのあり方を巡って、イラン国内で大規模なデモが頻発した。デモは世界中で広く報じられたため、研修に参加する前は、SIRの学生からもデモに関して肯定的な意見が聞けたり、テヘランで実際にデモに遭遇するのではないかと考えていた。しかし、実際にテヘランを訪問するとヒジャーブをつけずに歩く女性は散見されるものの、デモの痕跡さえ発見されず、街は平和そのものであった。加えて、ヒジャーブについてSIRの女子学生に対してどう思うか聞いたところ、「私は愛している。なぜなら文化だから」と返ってきたことも驚きだった。彼女曰く、ヒジャーブの着用に関して反対してるのはごく一部の人々であり、大多数の人はそれを文化として愛しているようだ。どちらが多数派かは置くとしても、日本での報道を鑑みると、ヒジャーブは女性の抑圧の象徴で、イランの女性はそれから解放されたがっていると思いがちだが、現地を訪問するとその見方は一側面にすぎないことがわかった。更に、テヘランを出て、イスファハーンやヴァルザネ、カーシャーンを訪問すると、テヘランとは違った気候、風土、暮らしを感じ、決して「イスラム」だけがイランではないことがわかった。このように広大な国土と多様な民族を内包するイランにおいて、一つの見方を出すのは難しい。どこの国からイランを見るかによっても異なった姿を現すだろう。西洋の見方に則れば、「野蛮な反米国家」かもしれないし、周辺諸国からみれば「頼りになる地域大国」かもしれない。完全にフィルターをとって見ることは難しいが、この研修で学んだことを生かして、これからも「多民族国家」イランを多様な側面から見つめていきたい。

(なお本所感は、執筆者個人の見解です)